「類義語の使い分けにおけるメタ言語知識の役割」

水口 里香[1]

本研究では、日本語學習者の「類義語の使い分け」の實態を明らかにすることを目的とし、日本語母語話者との比較を通して、語彙習得におけるメタ言語知識の役割について分析を試みた。調査項目には外來語を含む類義語を取り上げ、日本語學習者40名、日本語母語話者94名を被驗者とし、類義語に關する多肢選擇形式の問いと類義語間の違いについての自由回答法の問いから成る質問紙を用いて、調査を實施した。また學習者には、質問紙に關するフォローアップインタビューも實施した。

その結果、日本語學習者にとって、外來語をめぐる類義語を使い分ける際、使い分けの基準に關するメタ言語知識が有効であることが示唆された。以上の結果をもとに、本研究では、語彙指導法への示唆を提示する。

キーワード：類義語の使い分け・外來語・メタ言語知識・語彙習得・語彙の指導法

0.はじめに

日本語には、辭書に記載されている意味がほとんど同じでありながら語感的な違いで對立しているような類義語がとりわけ多い。しかしながら、日本語母語話者は、日常生活の中で同じ意味を表すいくつかの語を、無意識のうちに場面に應じて巧みに使い分けることができるという。では、第二言語として日本語を學ぶ學習者はどうなのだろうか。日本語學習者にとって類義語間の漠然とした違いを見極め、使い分けることは非常に困難だと豫想される。それは、日本語指導の中で、類義語の使い分けについてほとんど取り上げられていないこと、そして從來の辭書では他の語に置き換えて意味を說明しているものが多いため、辭書を調べても、類義語間の微妙な意味の違いを知ることは困難であるということに起因するのだろう。とりわけ、「アイディア」と「考え」のような一方の語が外來語の類義語を使い分ける場合、「アイディア」を原語の意味のままで捉えてしまう可能性があるため、より一層困難であることが豫想される。では、母語話者のように類義語を使い分けできる日本語學習者は、なぜ使い分けできるのであろうか。

もし、日本語學習者がどのように類義語を使い分けているのか、どのような點に困難を感じているのかなどといった「類義語の使い分け」の實態を知ることができれば、日本語指導、特に語彙指導に對し有効な示唆を得られると考えられる。

そこで本研究では、「類義語の使い分け」の實態を明らかにすることを目的とし、語彙習得とメタ言語知識の關係について調査・分析を行い、「類義語の使い分けにおけるメタ言語知識の役割」について追究した。

1．先行研究

1.1類義語習得に關する研究

まず、本研究における「類義語」の定義を記す。本研究では以下の定義を採用した。

・同一言語内で語形が異なっていても、そのさす意味がほぼ同じである二つ以上の語。(『國語學研究事典』p.93)

・幾つかの同じ意味特徴を共有する單語を類義語という。(『日本語教育事典』p.315)

これら定義をもとに、本研究では、「(イ)二つ(以上)の語の指しているものごとが同一(に近

1建陽大学外国語学部日語日文専攻・日本語教育

い)か。(ロ)それらのさし方、とらえ方において明らかな違いはないか。 (p.16) 」という松尾他(1965)に提示されている類義語の2條件をもとに、この2つの條件を滿たすと判斷したものを類義語とし、先行研究の概觀、及び調査を進めた。

類義語に關する研究は意味論の分野だけではなく、第二言語習得研究の分野でも行われてきている (Marilyn,1984；倉持,1986；Sonaiya,1991；田村,1997；松田,2000) 。これらの研究は、第二言語學習者による語彙の誤りのほとんどが第一言語轉移の結果というよりも、第二言語の中で生じる誤りであることを明らかにしたり、類義語を指導する上での効果的な方法を探ったりしたものである。しかし、管見の限りでは、非常に手薄な研究テーマであり、またいずれの研究においても、被驗者が「意味について判斷を下す時、何を手がかりにしているのか。」や「どのような知識を用いているのか。」などといったことまでは十分に把握されていない。したがって、今後、研究が必要とされる分野であろう。

また日本語習得研究分野における外來語の習得研究は、表記や音聲に焦點を當てたもの (大曾,1991；趙,1992など) が多く、「語彙習得」の問題として研究されているとは言い難い。したがって、研究結果に基いた外來語の指導法がほとんど提示されていないことにより、プレム(1991)で「日本語では和語・漢語・外來語が類義語として共存し、微妙に使い分けられている。(中略) これらのことばは日本人ならだれでも無意識に使い分けているが、外國人にはなかなか理解しにくい。 (p.29) 」と言及されていると、察することができる。このことからも、他の語種と類義關係にある外來語を日本語學習者がどのように使い分けているのかという「外來語をめぐる類義語の使い分け」の習得狀況を調査することは、意義のあることだと考えられる。

1.2 メタ言語知識に關する研究

1960年代後半から始まった第二言語習得研究において、近年、メタ言語知識と言語習得の關係を扱った研究に注目が集まるようになり、様々な研究が行われてきている。しかしながら、「メタ言語」について、未だ一致した定義は見當たらないと言える。そこで本研究では、「メタ言語」について『ロングマン應用言語學用語辭典』にある以下の定義を採用した。

「ある言語の單位や規則を分析したり記述するための言語。(中略) つまり、思考の對象として言語を扱い、様々な方法で言語を調べたり操作したりする。このような際に用いられる言語をメタ言語と呼ぶ。(p.229)」

次に「メタ言語知識」のついての定義を述べる。「メタ言語知識」についても未だ一致した用語及び定義は、見當たらない。そこで本研究では、用語については、Sorace(1986)の「メタ言語知識 (metalinguistic knowledge) 」という用語を採用し、定義については、Sharwood-Smith(1994) 等を參考に、「言語規則や言語形式に關するメタ言語を言語化・陳述できる知識」とする。

以上の「メタ言語知識」の定義を受け、本研究では、言語習得とメタ言語知識に關する先行研究の中でも、「學習者による言語ルールの言語化」を扱った研究を概觀・參考にした。

「學習者による言語ルールの言語化」を扱った研究とは、Think-aloud法などを用いて、被驗者にある言語項目のルールなどを言語化させたデータを用いた研究のことを指す。例えば、英語學習者に英語の定冠詞 (aとan) の違いについてインタビューを行ったSeliger(1979)や、日本語の助詞「は」と「が」の使い分けについて、日本語學習者にインタビューを行った八木(2000)などである。この他にも、Green&Hecht(1992)や小山(1997)などの研究があげられ、第二

言語習得研究分野の中で、徐々に行われてきている研究テーマである。しかし、Han & Ellis（1998）で「メタ言語知識が言語習得において重要な役割を果たしているという十分な證據は未だ提示されていない。」と指摘されているように、研究によって結論は様々である。また、先行研究において調査されている項目は、英語の與格交替・日本語の場所を表す助詞「ニ」と「デ」のような言語學習の教室内で教授されている文法項目がほとんどであり、と「類義語の使い分け」の習得とメタ言語知識の直接的な關係を追究することを研究課題とした研究は行われていない。

1.3研究課題

以上の先行研究から、以下の５點のことが示された。

・類義語習得に關する研究は非常に手薄な分野であり、今後の研究が必要な分野である。
・類義語習得に關する研究の中で、學習者はどのような知識を用いて、またどのような認知プロセスを經て語彙を使用しているのかについて詳細に調査した研究は、ほとんどない。
・メタ言語知識が第二言語習得にとって重要な役割を果たすものであると言われているが、十分な證據は未だ出されていない。
・メタ言語知識と語彙習得の關係に關する研究は、ほとんどない。
・語彙の使い分けを調査項目として、メタ言語知識の役割を追究した研究は見當たらない。

本研究では、先行研究では追究されていなかった以下の2つの研究課題を追究する。

①日本語學習者の場合、類義語の使い分けにとってメタ言語知識は有効なのか。
②日本語學習者の場合、メタ言語知識のほかに、類義語の使い分けに影響を及ぼす要因があるのか。

これらを追究することによって、本研究を「類義語の使い分けにおけるメタ言語知識の役割」についての基礎研究としたい。

2.豫備調査

以下の２點を目的とし、豫備調査を實施した。

１.調査語として選定した類義語を、日本語母語話者がどのように使い分けているかを調べ、日本語母語話者の持つ『類義語の使い分け基準』を得る。
２.本調査で用いる類義語を選定する。

2.1方法

豫備調査の被驗者は、日本語母語話者25名である。豫備調査で用いた類義語は、以下の手順で選定した。

①日本語教育のために刊行されている語彙表3種から、外來語を抽出する。
②3種の語彙表に共通して取り上げられていた外來語について、類義語辭典3種を調べ、その外來語と類義關係[2]にある和語・漢語を抽出する。

2類義語は2語で1対をなしているものだけではなく、3語以上の間に類義關係を仮定し得る場合もあるが、「3語以上になると、調査が難しくなる。（p.129）」という松尾他(1965)の結果を参考に、本研究では、一対比較法を採用する。

③再び、語彙表3種を使い、②で抽出された外來語と類義關係にある和語・漢語が、①の語彙表に採錄されているかを確認する。
④③で確認できた和語・漢語とその類義關係にある外來語のペアを調査語とする。
なお、ここでは、「テーブル-机」と言った具體語(=指示對象が物體)は調査語として選定せず、指示對象が物體ではない語に絞った。
この手順により、「イメージ/印象」・「ストップ/止まる(止める)」「キャンセルする/取り消す」などといった15ペアの類義語を選定した。
そしてこの15ペアを用い、調査紙を作成した。調査紙には松尾他(1965)の調査を参考に、文産出法の問いと類義語間の違いについての自由回答法の問いを使用した。文産出法(①・②)と、違いについての自由回答法の一例(③)を、表2-1に示す。

【表2-1　豫備調査用調査紙の一例】

①「イメージ」という言葉を使った文を一つ、作ってください。ただし、「印象」と言う言葉で置き換えることができないものを考えてください。

_____

②「印象」という言葉を使った文を一つ、作ってください。ただし、「イメージ」と言う言葉で置き換えることができないものを考えてください。

_____

③「イメージ」と「印象」には、どんな違いがあると思いますか。(想像するもの、意味・語感・使用場面など、何でもいいので自由に書いてください。)

_____

上述の調査形式で、15ペアの類義語すべてについて回答を求めた。

2.2 結果

まず、本調査で用いる調査語の選定について記す。
15ペアの類義語のうち、次のようなものを、調査語からはずした。
①「ストップする/止まる」のように『類義語の使い分け基準』が自由回答法の問いへの記述からは明確にされなかったペア。
②「イメージ(する)/印象」のように文産出法の問いへの記述から、品詞的な違いが顯著であったペア。
これらのペアを本調査で用いる調査語からはずした理由は、本調査において日本語學習者の持つ『類義語の使い分け基準』の測定を行うので、妥當な測定を行うためには、日本語母語話者内で比較的使い分けの基準が安定している類義語のペアを調査語として用いることが望ましいと考えたからである。その結果、以下の6ペアの類義語が調査語として選定された。

【表2-2　豫備調査の結果により選定した調査語】

ペア番號	語A	語B
1	スタート	出發
2	スピード	速度
3	テクニック	技術
4	トレーニング	訓練
5	ムード	雰圍氣
6	ルール	規則

3．本調査

3.1方法

3.1.1被驗者

本調査の被驗者は、英語圏日本語學習者20名、中國語圏日本語學習者20名である。また、ベースラインデータを收集するために、日本語母語話者（東京都内の大學生）94名も被驗者とした。

日本語學習者[3]（英語圏20名、中國語圏20名）は、都内の大學で日本語を學習中、または修士號・博士號取得を目的として日本で學んでいる留學生である。學習者の日本語學習歴、滞日歴等は様々であった。

3.1.2分析材料

（1）調査紙

豫備調査で得られた6ペアの類義語を用いて、調査紙の作成を行った。調査紙は、多肢選擇形式の問いと類義語間の違いについての自由回答法の問いから成る。多肢選擇形式の問いは、類義語の使い分けに關する被驗者の言語運用を調査するもの、類義語間の違いについての自由回答法の問いは、メタ言語知識の抽出を目的とするものである。多肢選擇形式の問いに用いた調査文は、豫備調査の文産出法の問いから得られた文を參考に、用例辭典など5種類の辭書に記載されている例文、及び4種の初級日本語教科書の本文から抽出した。調査文は1ペアにつき10文、計60文であり、すべて「語Aのみを使う/語Bのみを使う/兩方使う」という3擇形式にした。そして、類義語間の違いについての自由回答法の問いは、豫備調査と同じものを使用した。調査紙には、まず、多肢選擇形式の問いを類義語のペアごとに竝べ、その次に、違いについての自由回答法の問いを付した。表3-1に問題の一部を示しておく。

【表3-1　調査紙の問題例（「スタート」と「出發」）】

1：次の場合、あなたは、どちらの言葉を使いますか？(あなたが使うほうに、○を付けて下さい。)「兩方使う」と思った場合は、兩方に○をつけて下さい。《じっくり考えず、直觀で答えて下さい。》 ①明日の遠足の(スタート・出發)時間は午前6時だから、早く起こしてね。 ②國立競技場に集合したマラソン選手は、12時ちょうどに（スタート・出發)した。 2：「スタート」と「出發」には、どんな違いがあると思いますか。 （想像するもの、意味　語感　使用場面など、何でもいいので自由に書いて下さい。

調査紙は、日本語母語話者94名と日本語學習者40名に同一のものを用いたが、日本語學習者用の調査紙には漢字に振り假名をつけておいた。また日本語學習者用の調査紙には、以上の問いの他に、「似た言葉の使い分けについて、授業で學んだことがあるか」という問いと「似た言葉の使い分けについて、自分自身で勉强したことがあるか」という問いへの回答、そして出身地・母語・日本滞在歴・日本語學習歴(日本國内、日本國外別に)・日本語能力試驗合格級の記入を求めた。

3被驗者40名中、日本語能力試驗1級合格者18名(英語圏2名、中国語圏16名)、2級合格者3名（英語圏2名、中国語圏1名）、3級合格者1名(英語圏)、未受驗者は18名(英語圏15名、中国語圏3名)であった。

（2）SPOT （Simple Performance－Oriented Test）

本研究の「日本語學習者の場合、メタ言語知識のほかに、類義語の使い分けに影響を及ぼす要因があるのか。」という研究課題を追究するためには、使い分けに影響を及ぼす一因と考えられる日本語能力を測定する必要がある。そこで、日本語學習者群40名に對し、SPOTを實施した。SPOTとは、テープに錄音された一連の相互に無關係な文を聞き、回答用紙にあらかじめ記載されている文の缺落箇所（ひらがな一文字）を補うというテストである。このSPOTは、筑波大學で開發された日本語能力の新しい測定法で、プレースメントテストとして近年、廣く普及している。本研究では、Version.A(65問)を使用した。

（3）フォローアップインタビュー

本調査では、被驗者である日本語學習者に對し、調査紙回答の直後に、筆者がインタビューアーとなり、調査語として用いた類義語の使い分けについてのフォローアップインタビューを實施した。使用言語は日本語である。フォローアップインタビューを實施した理由は、「メタ言語知識の効果」を明らかにするため、及び日本語學習者の持つメタ言語知識について、信頼性と妥當性のあるデータの收集をするためである。

そして、本研究ではフォローアップインタビューで得られたデータを「メタ言語知識」の分析對象とした。その理由は、調査紙の自由回答法の問いに對して無回答であった被驗者も、インタビューの際には、筆者の質問に對し回答できていたためである。また、Seliger(1979)やHan et al.(1998)で、インタビューデータを被驗者の持つ「メタ言語知識」の判定材料として分析を行っていること、小山(1997)では學習者のデータの質を高めるために、インタビューデータを分析の對象としていることを參考にした。

インタビューでは、日本語母語話者から得たベースラインデータと、學習者の多肢選擇形式に對する回答と自由回答法の問いに對する記述とを比較しながら、以下の項目を中心に聞き出した。

・「どうして、～番では、A（B）を選びましたか。」
・「どうして、～番は、『兩方使う。』と考えましたか。」
・「語AとBには、どんな違いがあるか、具體的に話してください。」
・「語AとBから、イメージする言葉、もの、何でもいいので、話してください。」
・「この問題は、母語で考えましたか、それとも日本語で考えましたか。」

またインタビューの最後には、語の使い分けの方法、外來語の困難點や學習方法などを話してもらった。

インタビューは、すべて錄音し、メタ言語知識の測定、及び分析に必要だと考えた部分を文字化した。

3.1.3手順

本調査の手順を日本語母語話者・日本語學習者別に、以下に記す。

日本語母語話者94名に對しては、一齊に實施した。實施の際、解答を終えた問いは修正しないように指示した。時間制限は特に設けなかったが、被驗者は全員30分以内で回答を終えた。

日本語學習者に對しては、個別に實施した。實施の際は、母語話者と同じく回答を終えた問いは修正しないように、また、調査文の中に分からない言葉がある場合は、辭書を引かずに、その語を丸で圍んでおくように指示した。學習者に對しても時間制限は特に設けなかったが、

全員30分以内で回答を終えていた。そして調査紙記入後、フォローアップインタビューを行った。インタビューの時間は、一人につき約15～20分である。また、SPOTはインタビュー直後、または後日、個別に實施した。

3.1.4分析方法

分析を行うために、質問紙への回答、及びインタビューから得られた日本語學習者40名の「類義語の使い分け能力」と「メタ言語知識」に對し數値化を行った。本研究における「類義語の使い分け能力」と「メタ言語知識」については、以下のように定義する。

＊「類義語の使い分け能力」

・日本語母語話者と同じように類義語を選擇、使い分けができる能力。

＊「メタ言語知識」

・類義語の使い分けについて、日本語母語話者に近い使い分けの基準を持ち、またその知識を日本語で說明できる知識。

まず、「類義語の使い分け能力」の判定材料とした多肢選擇問題60問の數値化の手順を記す。日本語母語話者94名の多肢選擇問題に對する解答をベースラインデータとし、學習者一人一人の得點を決めていく。選擇肢の中で、94名の母語話者のうち、過半數(48名)に選ばれた選擇肢を「母語話者群の傾向」とし、學習者がそれと同じ選擇肢を選んでいた場合、「１」とする。ただし、60問中、8問は母語話者群の過半數による一致が得られなかった。この8問については、數値化を行わなかった。

次に「メタ言語知識」の數値化の手順を記す。「メタ言語知識」の數値化を行うための基準作成には、94名の日本語母語話者の回答と豫備調査で得た日本語母語話者の持つ『類義語の使い分け基準』を採用した。數値化は、データの妥當性を高めるため、筆者と日本語母語話者(日本語教師歴10年)1名、計2名で行った。數値化は、日本語母語話者群の『類義語の使い分け基準』をもとに3つの尺度を作成し、3點法により採點した。2人の判定が一致しなかった場合には、2人の平均を取った。

2人の採點者間の一致率を、相關係數により1ペアづつ求めたところ、最も低い一致率であっても、0.86であった。これにより「採點者間信頼性がある」と判斷し、2人の採點者による數値を被驗者の「メタ言語知識」として採用した。

3.2結果

1.3で提示した研究課題に沿って、結果を記述していく。なお、統計處理には、統計ソフトSPSS Ver.9.0を使用した。

≪研究課題①に關する結果≫

類義語の使い分けとメタ言語知識の間に相關があるのかを調べるため、「メタ言語知識」得點と「使い分け能力」得點のピアソンの相關係數を求めたところ、１％水準で有意な相關が見られた（$r=.50$　$p<.01$）。したがって、メタ言語知識の高い被驗者ほど、全般的に見て、母語話者群のように類義語を使い分けることが出來ることが明らかになった。

≪研究課題②に關する結果≫

①に關して、いくつかのペアについては「使い分け能力」得點と「メタ言語知識」得點の間に有意な相關が見られた。しかしながら、外來語をめぐる類義語を使い分けることは、メタ言

語知識のみと關係するものではなく、その他様々な要因とも關係していると豫想される。そこで、本研究では、母語、滞日歴、日本語能力、メタ言語知識[4]という4つの要因と、類義語の使い分けに關係があるかどうかについて、統計處理を行った。

しかし、類義語の使い分けについて、フォローアップインタビューをおこなったところ、特に英語圏被驗者に、母語による影響が強く見られたことから[5]、母語による影響は「使い分け能力」得點に影響を與えていると言うよりはむしろ、「メタ言語知識」得點のほうに影響を與えていると考えられた。そこで、母語を獨立變數、「使い分け能力」得點を從屬變數とした t 檢定を實施した。すると、兩群の間で「使い分け能力」得點の平均値に、有意差は認められなかった（t(38)=1.06,n.s.）。また、母語を獨立變數、「メタ言語知識」得點を從屬變數とした t 檢定でも、2群の平均値に有意差は認められなかった（t(38)=1.23,n.s.）。したがって、母語による影響があると信ずべき理由がないと判定した。そこで母語という要因を考慮せず、滞日歴、日本語能力、メタ言語知識を獨立變數、「使い分け能力」得點を從屬變數とした3要因2×2×2の分散分析を行った。その結果、メタ言語知識の主効果のみが、１％水準で有意であった（F(1,32)=10.85,p<.01）。それ以外のすべての主効果、及び交互作用等は、有意にはならなかった。

4.考察、及び本研究から示唆

4.1考察

分析の結果、類義語の使い分けとメタ言語知識の間に有意な相關が認められたが、母語・滞日歴・日本語能力という要因は、類義語を使い分けできることと關係が見られなかった。そこで、以上の要因のうち、母語と日本語能力という要因に關する結果を、先行研究と照らし合わせながら考察していく。

まず母語という要因について考察する。Hancin-bhatt et al.(1994)をはじめ多くの先行研究で第二言語の語彙學習における母語の影響について報告されていることから、また本調査では、すべて英語を原語とする外來語を調査語としたことから、2種類の母語影響を豫測していた。ひとつは、英語を母語とする被驗者は原語である英語の意味のままで日本語の外來語を運用してしまうという影響で、もうひとつは、日本語の外來語のような語種を持たない中國語を母語とする被驗者は、日本語という外國語の中のもうひとつの外國語と認識しがちな外來語よりも理解容易な和語／漢語を優先してしまうという影響である。しかしながら、t 檢定の結果、類義語の使い分けに母語の影響が作用するとは言えないことが明らかになった。この結果は、英語圏被驗者は母語による影響を受けていたようだが、中國語圏被驗者は母語ではなく、原語である英語の影響を受けているかもしれないことによるだろう。例えば、「英語の"technique"

4研究課題②を追究する際、「メタ言語知識」得点は、カテゴリー化して扱った。

5フォローアップインタビューで、類義語の使い分けの基準に関し、母語による影響が強かったということの例を、以下に記す。（括弧内のE1とは、英語圏被験者№1のこと、C１とは、中国語圏被験者№1のことを表す。）

・「速度」は、"velocity"で、「スピード」は、英語の"speed"で考えた。（E３・E8）

・中国語では、「速度」＝「スピード」なので、2つは同じ意味だと思う。（C2・C15）

・「技術は、英語の"technology"と同じだと思う。」（E７・E14・E20・C1）

・「ムードは、"mood"。雰囲気は、"atmosphere"で考えた。」（E１・E２・E９・E13・C1・C3）

と『テクニック』は同じ。」(E1,3,9)と「『テクニック』は、英語の"technique"で考えた。」(C4,8,11) などである。従って、統計結果に母語の影響が見られなかったと考えられる。またインタビューでの「外來語は、難しいですか。どんな點が難しいですか。」という外來語に關する質問に對し、「英語との發音や意味の違い。」と答える者が英語圏被驗者にも中國語圏被驗者にも多く、外來語學習の困難點にも母語による違いが現れにくいようであった。このことからも、英語圏と中國語圏の間に有意差が認められるほどの違いが見られなかったと推察できる。

以上、母語という要因に關する結果は、Sonaiya(1991)の「母語轉移だけでは語彙的誤りの性質を十分に説明できない。(p.273)」という指摘を支持するものであった。

次に、日本語能力という要因について考察する。メタ言語知識と言語習得の關係を扱った先行研究で、言語能力が發達するにつれて、文法性判斷テストの正解率が高くなっていく(Ellis,1991など) という結果が提示されていたことから、日本語能力という要因が本研究の「使い分け能力」得點にも影響を及ぼしていることが豫想された。しかし統計の結果、SPOT Ver.Aの結果によって「上位群」・「下位群」という2レベルに分けた日本語能力という要因は、「使い分け能力」得點に影響を及ぼしていなかった。つまり本研究は、先行研究の多くと異なる結果になったのである。では、どうしてこのような結果になったのだろうか。この原因として、以下の2つのことが考えられる。

まず、1つ目の原因は、日本語能力のレベル分けに使用したSPOT Ver.Aと本研究の日本語學習者群の關係である。本研究の被驗者40名の平均値が58.95點(65點滿點)であったことから、本研究に使用したVer.Aは、被驗者にとって易しすぎたと言える。このことは、小林(1996)の「ver.2難しい版[6] の文法項目の2/3は日本語能力試驗3級レベル以下の項目で殘りの1/3が中上級項目となっている。(p.211)」という言及からも裏付けできる。したがって本研究においては、Ver.Aよりも難易度の高い他のバージョンを使用すべきだっただろう。また、小林(1998)に「能力差のあまりない同じレベルのクラス内での評價には不向きなようである。(p.10)」とあるように、本研究の被驗者のレベル分けには不向きであったのだろう。したがって、本研究でいう日本語能力が「類義語の使い分け」得點に影響しなかったと考えられる。

そしてもう一つの原因として考えられることは、先行研究の調査項目と本研究の調査項目の違いである。1.2に記したように、先行研究のほとんどが教室内で教授されることの多い文法項目を調査項目としていたが、本研究の調査項目は語彙であり、また教室内で明示的に教授されることのほとんどないと考えられるものである。したがって、教授されたことのない項目に關するタスクの得點は、プレースメントテストなどによって測定される一般的な第二言語能力と關係ないと言えるのではないのだろうか。本研究の結果と同じように、被驗者の日本語能力が、タスク遂行に用いるストラテジー、及び正答率に影響を及ぼさないという結果を示した研究に、Mori(in print)がある。Mori(in print)は、被驗者にとって未知であり、かつ教授されたことのない漢字複合語を調査項目とし、漢字複合語の意味についてのテストと、「漢字から意味を推測する」・「文脈から意味を推測する」・「漢字と文脈の兩方を使って推測する」という3つのストラテジー使用に關するアンケートを實施した。その結果、プレースメントテストにより判定した日本語能力では、漢字と文脈の兩方から推測してテストに正解できることの説明にはならないことを明らかにした。そして、この結果の説明となるものを、學習者のメタ認知的、またはメタ言語的意識であるという假説を立てている。メタ言語知識が高い學習者ほど、

6小林(1996)の「Ver.2難しい版」とは、本研究で使用したVer.Aと同じものである。

そのメタ言語知識を用いて、類義語を使い分けられるという示唆が得られた本研究の結果は、このMori(in print)の假說を支持したといえるのではないだろうか。

以上をまとめると、本研究の結果は、「適切なルールを表出できるからといって、適切に運用できるのではない。(p.364)」というSeliger(1979)等とは異なるものであり、「メタ言語知識と言語使用には關係がある(p.244)」としたSorace(1986)等の結果と同樣に、メタ言語知識の果たす役割を示したと言える。そしてこのことは、Nagy(1997)の「第二言語の語彙習得の場合、コンテクストよりも明示的なインストラクションのほうが語彙擴大にとって重要な役割を果たすこともある。(p.76)」を支持できるものであろう。

4.2 語彙指導法への示唆

以上の考察から、類義語の使い分けにおけるメタ言語知識の役割が示された。日本語教育における語彙指導のあり方に對し問題を提起し、示唆を提示したい。

日本語教育に限らず、第二言語教育全般では、文法・音聲などの指導に時間がとられ、語彙の正しい使い方などといった語彙の指導に十分な時間が當てられていないというきらいがある。また從來の語彙指導法では、「語彙リストを提示する」・「辭書の定義を暗記させる」・「用例を提示する」といった方法が取られることが多く、組織立った語彙指導は行われていないと言えよう。語彙指導に十分な時間が當てられていないことにより、學習者は辭書を使用し、自力で語の理解を進めていることが多く、そのために語彙的誤りを犯しやすくなったり(Summers,1995)、外國語の語彙の意味が母國語の對應語の意味と一對一對應するという信念を持ってしまう(今井,1993)という。

では、日本語の語彙指導で廣く用いられている「用例を提示し、語の理解を促進させる」という方法は、どうであろうか。この方法によって學習者は、提示された語がどのような形で他の語と關わりあうのかといった辭書的意味を超えたコンテクストレベルにおける語の正しい使い方を理解できると考えられている。しかしながら、先行研究ではこの方法に對しても問題が提起されている。例えば、教師の提示する用例が語のもつ特徵のうち、いくつかの特徵を缺いたバイアスのかかった用例である場合、學習者の語の理解もバイアスのかかったものになってしまう(Tanaka,1987)ことがあったり、教師の擧げる用例から、そこに共通している語の意味を汲み取ろうとする態度が學習者の內に養われていなければならない(淺野,1981)などである。

では、第二言語教育において、有効な語彙指導とはどのようなものなのか。この疑問に對し、本研究の調査結果からの示唆、及びNagy(1997)などで言及されている「定義重視の教授(definition-based instruction)」に依據した指導法、「語彙項目に關するメタ言語知識を提示する方法」を提案したい。

ここでまず、「定義重視」の語彙教授について觸れておく。この「定義重視」の語彙教授とは、言語項目に關する知識やルールを學習者に提示する方法のことである。この方法は「用例提示」方法と相對するものと考えられているようであり、これら方法について語彙習得研究をはじめ、第二言語習得研究の中で議論されている(Nagy&Gentner,1990; Sharwood-Smith, 1994; Nagy,1997; 松田,2000など)。

本研究では、言語項目に關する知識を「メタ言語知識」と呼び、「メタ言語知識を提示する方法」の有効性を提起する。この方法は、決して「用例提示」の方法と相對するものではなく、むしろそれらと相補的な關係にある。それは、教師はメタ言語知識を提示するだけではなく、そのメタ言語知識や言語ルールを適用できないような用例を提示し、學習者に語を多角的

に理解させることが、語彙指導において有効だと考えられるからである。特に、本研究で取り上げた類義語の場合、教師はただ單に用例のみを提示するのではなく、使い分けに關する基準を簡潔に說明し、學習者に語の意味境界を捉えさせるようにすべきであろう。しかしそれだけではなく、この基準では說明できないような用例も提示し、學習者にコンテクスト全體を通して意味境界を捉えさせるという方法である。また、教師は學習者の持つ語彙に關する知識が不安定である(Mori,1996)ことを常に認識し、語彙指導を行うべきである。

5.まとめと今後の課題

日本語學習者が日本語の類義語を使い分ける場合、様々な要因が影響すると考えられるが、本研究により、外來語をめぐる類義語の使い分けにおけるメタ言語知識の役割が示された。そしてこの結果は、「類義語の使い分けにおけるメタ言語知識の役割」についての基礎研究に寄與するものと考えられだろう。

しかしながら、Yelland et al.(1993)で「メタ言語知識の發達は、第二言語能力とは獨立して發達するようである。」と示されているように、メタ言語知識が、何によって、またどんな過程を經て、學習者に意識されるのか、表出できるようになるのかについて、本研究からは十分な假說が導き出せない。また本研究の結果のみからで、「メタ言語知識」のみにより「類義語を使い分けできる」とするのは時期尚早であろう。

そこで今後は、メタ言語知識の發達要因・發達過程などについて縱斷的な研究を進め、語彙習得とメタ言語知識の關係について研究を重ね、研究結果に基いた語彙指導法を提案していきたい。

そして、本研究では學習者のメタ言語知識を測定するために、日本語によるフォローアップインタビューのデータを用いた。しかし「メタ言語知識はあるのに、日本語能力の影響によってそれを言語化できない。」という可能性も考えられるので、Seliger(1979)が指摘している通り、この方法では彼らの意識しているメタ言語知識をすべて引き出せたとはいえない。したがって、メタ言語知識の測定に有効な方法のについても追究していきたい。

※本稿は筆者の修士論文の一部を修正・發展させたものである。
お茶の水女子大學人間文化研究科言語文化專攻日本語教育コース 平成13年度修士論文
「類義語の使い分けに關する研究-メタ言語知識の役割について-」(2002)

參考文獻

淺野百合子(1981)『教師用日本語教育ハンドブック⑤　語彙』，凡人社
今井むつみ (1993) 「外國語學習者の語彙學習における問題點 −意味表象の見地から −」『教育心理學研究』41,pp.243-253 日本教育心理學會
大曾美惠子(1991)「英單語の音形の日本語化」『日本語教育』74,pp.34-47 日本語教育學會
倉持保男(1986)「日本語教育における類義語の指導」『日本語學』5-9,pp.47-55 明治書院
佐藤喜代治(1977)『國語學研究事典』，明治書院
小林典子(1996)「日本語能力の新しい測定法【SPOT】」『世界の日本語教育』6, pp.201-218 國際交流基金日本語國際センター
小林典子(1998)「日本語學習に對するプレースメントテストとしてのSPOT」『日本語學習に對するプレースメントテストとしてのSPOT(Simple Performance-Oriented test)』

研究成果報告書(3),pp.5-11 筑波大學
小山悟 (1997) 「文法性判斷テストは何を見ているのか。」『九大留學生センター紀要』 9, pp.37-50 九大留學生センター
田村泰男 (1997) 「類義語指導のための基礎的研究(1)」『廣島大學留學生センター 紀要』 8,pp.15-25 廣島大學留學生センター
趙南星(1992)「韓國人の日本語學習における外來語表記の誤り -日本語話者による評價を中心にして-」『日本語教育』 78,pp178-190 日本語教育學會
日本語教育學會(1988)『日本語教育事典』, 大修館書店
プレム・モトワニ(1991)「日本語教育のネック-外來語」『日本語教育』 74pp.28-33 日本語教育學會
松尾拾、西尾寅彌、田中章夫(1965)『類義語の研究』, 國立國語研究所
松田文子 (2000) 「日本語學習者による語彙習得－差異化・一般化・典型化の觀點から－」『世界の日本語教育』10, pp.73-81 國際交流基金日本語國際センター
八木公子(2000)「「は」と「が」の習得-初級學習者の作文とフォローアップインタビューの分析から-」『世界の日本語教育』 10,pp.37-53 國際交流基金日本語國際センター
Ellis,R.(1991) "Grammatical judgments and Second Language Acquisition . "Studies in Second Language Acquisition 13-2 pp.161-186 : Indiana University Linguistics Club
Green,P.& Hecht,K.(1992)"Implicit and explicit grammer: an emplical study." Applied Linguistics 13-2 pp.168-184 :London : Oxford University Press
Hancin-bhatt,B & Nagy,W.E. (1994) "Lexical Transfer and Second language morphological development."Applied Psycholinguistics15-3 pp.286-310: Cambridge Eng.:Cambridge University
Han,Y.&Ellis,R.(1998)"Implicit,Explicit Knowledge and general language proficiency." Language teaching Research 2-1 pp.1-23: London, U.K.:Arnold
Marilyn,M.(1984) "Advanced vocabulary teaching: the Problem of synonyms." The Modern Language Journal68-2 pp.130-137: National Federationof Modern Language Teachers Associations
Mori,Y.(1996)"What are major vocabulary problems faced by learners of Japanese?"In S,T.Hayes. &E,Takahashi.(Eds.) Proceedings of Eighth Annual Conference of the Lake Erie Teachers of Japanese: Back to Basics :Building Automaticity. pp.95-109:Pittsburgh: University of Pittsburgh
Mori,Y.(in print)."Individual differences in the integration of information from context and word parts in interpreting unknown kanji words."Applied Psycholinguistics, 23-3. Cambridge,Eng.:Cambridge University
Nagy,W.E.(1997) "On the role of context in first- and second-language vocabulary learning." In N.Schmitt.& M,McCarthy.(Eds.) Vocabulary:Description,Acquisition and Pedagogy pp.64-83: Cambridge: Cambridge University Press
Nagy,W.E.&Gentner,D.(1990)"Semantic constraints on lexical categories." Language and Cognitive Processes 5-3 pp.169-201 : VNU Science Press
Richards, Jack C編(山崎眞稔譯) (1988)『ロングマン應用言語學用語辭典』, 南雲堂

Seliger,H.W.(1979) "On the nature and function of language rules in language teaching."TESOL Quarterly 13-3 pp.359-369:Washington,D.C.:TESOL
Sharwood-Smith ,M.(1994)Second language learning: Theoretical foundations, Longman, London.
Sonaiya, R. (1991) "Acquisition as a process of continuous lexical Disambiguation." IRAL:International Review of Applied Linguistic in Language Teaching29-4 pp.273-284:Heidelberg : J.Gross
Sorace,A.(1986) "Metalinguistics Knowledge and Language use in Acquisition poor Environments." Applied Linguistics6-3 pp.239-254:London : Oxford University Press
Summers ,D.(1995) "Do Dictionary Really Help?"the Language Teacher19-2 pp.25-28 : 全國語學敎師協會
Tanaka,S.(1987)"The Selective Use of Specific Examplers in Second-Language Performance: The Case of the Dative Alternation. "Language Learning 37-1 pp.63-88: Research Club in Language Learning
Yelland,G.W.& Pollard,J.& Mercuri,A.(1993)"The metalingusitic benefit of limited contact with a second language." Applied Psycholinguistics 14-4 pp.423-444: Cambridge, Eng. :Cambridge University

《Abstract》

"The role of metalinguistic knowledge in choosing Japanese Synonyms"

Mizukuchi,Ri-Ka

There are a variety of synonyms in the Japanese language and Japanese native speakers use different synonyms to suit different situations. However, using synonyms to suit different situations can be a difficult task for Japanese language learners. So how do second language learners of Japanese choose synonyms? This is an experimental study aimed at pursuing this question and pinpointing the role of metalinguistic knowledge in vocabulary acquisition by second language learners of Japanese.

The subject of study were synonyms including loan words from English(ex. "sokudo" and "speed"). 40 second language learners of Japanese and 94 Japanese native speakers were the subjects of this study. This study used a written task which consisted of multiple-choice questions about synonyms and open-ended questions about difference between synonyms. Individual follow-up interviews of the 40 second language learners were also taken about the task. The data collected from 40 learners was analyzed in comparison with 94 Japanese native speakers.

The result suggested that metalinguistic knowledge of synonyms is effective when second language learners of Japanese choose synonyms which include loan words.

By this result ,this study gives suggestions for vocabulary teaching.

專攻：日本語敎育
勤務先：建陽大學外國語學部日語日文學專攻
住所　：320-711　忠淸南道論山市奈洞26　建陽大學校　外國語學部　日語日文學專攻
電話番號：041-730-5366
E-mail：mizurika@konyang.ac.kr

KCI